

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス

SUN通信 第11号

2021. 6. 16 発行

NPO法人 自立支援事業所
サンレジデンス

〒011-0023

札幌市北区北23条西5丁目

1-18 Dio23ビル3F

TEL 011-746-8889

FAX 011-758-1166

見えない脅威に対する無力感

ほとんどの国民が、もう無意識のうちに外に出るときはマスクを着用し、家に帰ったら手指消毒というルーティンが生活の中で繰り返されるようになってから、まもなく1年半になるようとしています。この間、このしたたかなウィルスは収束の兆しをみせるどころか、その形態を次々に変えていき、まるであざ笑うかのように、真綿で首を締めるかのように、今も人類に対して攻撃を続けています。



まん延防止重点措置、非常事態宣言、正しいかげんうんざりする気持ちも理解できますが、一個人として出来ることは、基本的な感染対策を取るしかないことも事実です。幸いサンレジデンスにおいては、現在までにスタッフ、入居者に感染者は出ていません。

しかし、どんなに気を付けていても感染の危険はあります。特に私たちの活動は、人との接触を止めるわけにはいかないという側面があります。入居者の病院送迎や食事提供、家賃集金時における安否確認、そして新規相談者との面談等、どれをとっても、行政が推奨するテレワークというわけにはいきません。

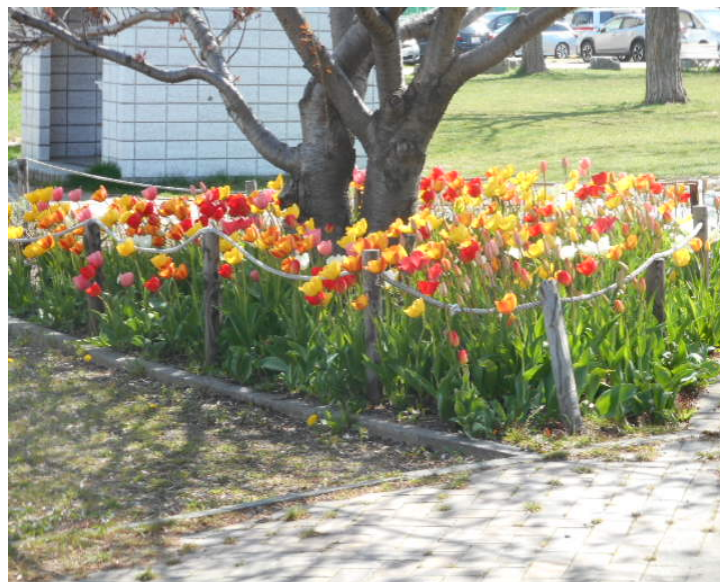
このコロナ過が始まって以来私は、靴の中に入り込んでしまった小石をなぜか取り除くことが出来ず、何とも言えない嫌悪感を抱きながら歩き続けている、そんな感覚に陥っています。すでに崩壊が始まっていると言っても過言ではない現場において、今もなお懸命に従事する医療関係者の負担を少しでも軽減させたいという気持ちは、大多数の国民が持っているはずですが、「〇〇県の今日の感染者は過去最多・・・」などという報道に接する

と、絶望的な無力感に襲われます。

また、我慢をしながらもしっかりとマスクを着けて学校に通い、楽しいはずの給食の時間も黙食を続けている子供たちは、自分勝手な理由でマスクの着用を拒否し、くだらない事件を起こす大人や、飲食店が締まっているからと路上飲みをし、街の中にゴミをまき散らす大人たちを見てどんな気持ちになるのでしょうか。もう一度、私たち一人ひとりに出来る対策は何であるかを顧みるべきではないでしょうか。この夏、東京オリンピックが開催されるかは不透明のままですが、感染拡大の懸念以上に私は、こんなにも情けない今の日本の姿を、海外の人たちに見てほしくない、そんな思いさえ湧き上がってくるのです。

ようやくスピード感が出てきたワクチン接種に期待しながらも、まだまだ出口は見えません。そもそも出口などないのかもしれませんが。歴史上、人類はウィルスの脅威に晒され続けてきました。そしてまた今、新型コロナというたった一つの要素が入り込むだけで、人間社会はこんなにも脆く崩れかけ、うろたえてしまうことを、世界中が痛感しています。

この時期、北海道は一年で最も過ごしやすく、爽やかな季節です。しかし去年と同様に今年も、まるで自分の周りだけが色を失い、灰色の世界に放り込まれてもがくことすらできない状況が続いています。



でもそんな中、ふと公園や庭に目を移すと、木や花がコロナなど関係ないよと言わんばかりに咲き乱れ、その美しさを誇示しています。普段であれば気にも留めなかった風景に心を奪われ、そのたくましさに励まされている自分に気づいたりもしています。

地球上に生息する生物の頂点に君臨していたつもりの人間が、本当は一番弱い生き物なのかもしれないと、最近事あるごとに考えてしまいます。

コロナ過から見えてくるもの

サンレジデンスにおいて、現在就労中で自立生活を送っている人は全体の約 20%です。ウィルス感染症の影響により、一時的に仕事量が減り、収入が安定しなくなったという方が数名いましたが、シフト調整や配置転換等、職場の配慮と工夫にも助けられ、仕事を失

った人は幸いにも今のところいません。望まない孤立を経験してきた彼らは、この不安定な状況下、必死に働き、自らの力で立ち直り、地域社会に根付いて生活しています。そんな彼らに接する時こそ、私たちはサンレジデンスの存在意義を感じる事が出来るのです。そして私は、立ち直りに成功した彼らに、ある一つの共通点があることに気づきました。それは自立に至るまでのスピードの速さに加え、「なるべく国の世話になりたくない」という思いの強さでした。

今年1月の参院予算委員会の中で、菅総理は「日本には最終的に生活保護という制度がある」と発言しました。生活保護まで行かせないための対策にも焦点を当てられる社会であってほしいと強く望みます。また、生活保護を受けるまでには相当のハードルがあることや、生活保護に至るまでに苦しんでいる国民が多くいることを社会が認知していかなければならないと感じます。

様々な理由で生活困窮に陥ってしまった人には、確かに生活保護は有効な支援策の一つであることは間違いありません。私たちのところに来られる相談者も、最初はこの制度を

利用して生活の立て直しを図るケースがほとんどです。しかしその大多数が、自分が生活保護など受けてもいいのだろうか、本当は受けたくないと思っている事実、ここに大きな問題があるのです。

生活保護申請書の一部

こんなデータがあります。ある支援団体が開催した生活困窮者相談会において、今までに生活保護を受給したことがないという相談者およそ100名に対し、受けることをためらう理由を調査したところ、最も多かった答えが家族に知られたくない、親族に迷惑をかけたくないというものでした。

生活保護を申請すると当事者の親族に対し、「この方を扶養（援助）出来ませんか」という扶養照会が届きます。実は当事者にとって、これが大きな壁になっているのです。身内を支えたくても支えられない世帯が急拡大している社会の中で、長年会っていない親や兄弟に、自分の現状を知られてしまう。つまり、「生活保護＝恥」であると考える人が圧倒的に多いのです。そして扶養に繋がるケースはほぼありません。

更には、日本の生活保護制度では、資産の保有が認められないという大きな特徴があります。すべてのケースに当てはまるわけではないですが、基本的に預預金はもちろん、証券や土地家屋、自動車や貴金属等を処分、活用してもなお生活が出来ない状態になって初めて申請が受理されます。また生命保険をかけていた場合も、契約解除を求められるので

す。分かりやすく言えば、「すっからかん」にならないと生活保護を受けられないということです。コロナが始まってから、数えきれないほどの相談を受けてきました。路上生活にまでは至っていないが、今後どうなるか分からないというものがほとんどです。生活保護についてアドバイスをしながら私は、この人はこの精神的・物理的なハードルを越えて保護に繋がるだろうか、こんな社会的な理解を得られない制度なんか本当は使いたくないだろうなどと思う反面、いち早くこの制度を利用してやり直しに繋げてほしいと願ってまいります。

支援を続けてくださる皆様へ

重苦しい閉塞感が広がり、誰もが大変な思いをしている中、私たちサンレジデンスの活



マスクや消毒液を頂きました

動に賛同し、変わらない支援を続けていただいている方々があります。私たちにとってはまさに勇気そのものです。本当にありがとうございます。また時勢を反映してなのか、一般の方から物品の寄贈やボランティアの申し出が増えています。札幌の高校生からは、探究活動を行う上で、日本の生活保障について教えてほしいと質問状が届いたりもしました。ほんの少しですが、社会の中で困窮者問題に目を背けるのではなく、身近なものとして捉え始めた人が増えて

いるのかもしれませんが。

サンレジデンス入居中の、高齢者に対するワクチン接種が徐々に進んでいます。このまま誰一人感染することなく、コロナが収束してくれることを願うばかりです。我慢の時間はまだまだ続くと思われまます。以前の生活に戻れるのかどうか、私には分かりません。むしろ、以前の生活に戻るのではなく、新しい生活スタイルが構築されていく世の中において、どのように対応していくのかを考える事の方が重要なのだと思います。

皆様が今後もお元気でいられることを願ってやみません。

NPO法人 自立支援事業所 サンレジデンス
松下 和広

※ご寄付・ご寄贈をいただいている皆様

(株)アパートナー本社様 (株)アパートナー東北支社の皆様 照井 淳矢様
(株)イマージ様 二木 覚様 中村 広子様 三上 敏実様 佐藤 久美子様
トクメイキボウ様 A・S様 コミュニティーワーク研究実践センター様

心より感謝申し上げます。